

平成 30 年 6 月 10 日現在

機関番号：32621

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2016～2017

課題番号：16H07191

研究課題名（和文）アラブ地域における君主制安定のメカニズム：モロッコとヨルダンの事例から

研究課題名（英文）Searching for the Mechanism of Arab Monarchies' Resilience Using Case Studies of Morocco and Jordan

研究代表者

白谷 望（SHIRATANI, Nozomi）

上智大学・グローバル・スタディーズ研究科・研究員

研究者番号：40780119

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、モロッコとヨルダンを事例として、「如何なるメカニズムでアラブ君主制が安定を維持しているのか」という問いを考察することである。その際、両国において「名目的」政権交代を可能とする選挙と議会制度に注目した。当初は、モロッコを事例とした研究で提示した「与党・野党のローテーション制」モデルを、ヨルダンとの比較から精緻化することを目指したが、ヨルダンの事例では同モデルの適用が困難なことが明らかとなった。そのため、モデルの修正を目指し、両国の議会政治において主要なアクターであるイスラーム主義政党に注目し、それらと体制との関係を「イスラームの政治的利用をめぐる相克」という視点から分析した。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research was clarifying the mechanism of Arab monarchies' resilience from the case studies of Morocco and Jordan, a resilience that was verified by the aftermath of the "Arab Spring" wave, focusing on party politics and the electoral systems. In my previous research, I suggested that Moroccan party politics since 1990s might be better understood as a new strategy by the king, "the rotation of the ruling parties and the opposition," under the name of nominal democracy.

I tried to refine this model applying the case study of Jordan. However, it became clear that the factors that make the rotation possible in Morocco do not hold in Jordanian case. Therefore, I tried to focus on principal political actor in both cases, the Islamists, to clarify their relationship with the regime and their manner in formal/informal political fields.

研究分野：中東・北アフリカ地域研究、比較政治学

キーワード：モロッコ ヨルダン 君主制 議会 政党 選挙 イスラーム主義

1. 研究開始当初の背景

2011年初頭から中東・北アフリカ地域を飲み込んだアラブ政変(通称:アラブの春)は、同地域の堅固と言われた権威主義体制を崩壊させ、政治改革もしくは内戦状態へと導いた。しかし、モロッコとヨルダンを含む君主制諸国においては、その支配体制が揺らぎを見せることはなかった。

その後のアラブ政治研究では、往々にしてエジプトやシリアなどの革命や内戦に陥った国々に関心が集まり、変化が視認しづらい君主制に関する研究は不十分であると言わざるを得ない。したがって本研究では、先行研究におけるこうした空白を埋めるため、アラブ君主制諸国の中でも「原油レント」などで国民からの「忠誠を買う」ことの出来ないモロッコとヨルダンに注目し、比較政治学の議論に加えて、綿密な一次資料解析とフィールド調査を組み合わせることで、上記の問いに対して検討を加えた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、モロッコとヨルダンを事例として、「如何なるメカニズムでアラブ君主制が安定性を維持しているのか」という問いを考察することであった。その際、両国において「名目的」政権交代を可能とする選挙と議会制度に注目した。具体的には、モロッコを事例としたこれまでの研究で提示した「与党・野党のローテーション制」モデル(時代状況に応じて、支配体制が与党と野党を入れ替え、体制の安定維持を図ることを)、ヨルダンとの比較から精緻化することを目指した。

3. 研究の方法

以前の研究で、モロッコでは、従来は政治勢力を分断し、その力を削ぐことに重点が置かれてきた支配戦略(分断統治)が、90年代以降、社会の不満のガス抜きと同時に支配体制を正当化するため、与党・野党を組み替える戦略へと変化していることを指摘し、これを「与党・野党のローテーション制」[白谷2014]としてモデル化した。

「与党・野党のローテーション制」とは、時代状況に応じて、支配体制が与党と野党を入れ替える制度を意味する。この制度下では、野党が複数存在するものの、全政党が体制の正統性を認めることと引き換えに、政治参加を認可される。加えて、ローテーションは、与党の座を $A \rightarrow B \rightarrow C$ というように単純に回転させるのではなく、 $A \rightarrow B \rightarrow A + B' \rightarrow C$ というように、状況に応じて、体制強化に寄与しうると考えられる勢力が選択される。こうした制度下では、野党に回った政党にも再度与

党となる可能性が残されることから、体制から期待される一時的な野党の役を果たそうとするため、政党政治の活発性は維持される。この仮説の前提として、政治勢力は分断され、複数のアクターの協力による巨大な勢力が現れない。こうして、「名目的」と与党と共に、必ず「名目的」野党が存在し、名目的な選挙による政権交代が起こるので、体制は外見的には民主的國家を装うことが可能となる。また、モロッコの事例に関して言えば、ローテーションを可能とする条件は以下の3つである: 政治アクターの細分化と連立形成の必要性、与野党間の調整役としての王党派政党の存在、政府への不満・変革の要求の高まり。

本研究ではヨルダンの事例との比較分析を通じて、このモデルの妥当性・普遍性を検討することを目指した。政党政治や議会が比較的機能しているヨルダンではあるが、1957年から92年までは政党活動が禁止されており、多数の政党が結成されたのは90年代の政治的自由化以降である。また、その後は定期的に選挙が実施されているものの、単記制の採用を背景に、2010年選挙までは当選者の半数以上が無所属であった。他方、内閣は特命政権としての性格が強く、短期間での内閣交代が頻繁に行われる。つまり、「一見すると改革の成果を出せない内閣が立て続けに辞職しているように見えるが、むしろ政局に応じて適任と思われる首相に担当させていると見る方が正しい」のである[吉川2014:136]。このように、ヨルダンでも社会の不満のガス抜きとして首相の「首のすげ替え」が行われているが、それは選挙を通じたものでないことが多く、ローテーション制モデルの検討・修正に適した事例だと考えた。

そこで、本研究の課題として以下2つを設定した。

- ・課題1: ローテーションを可能とする上記3つの条件をヨルダンの事例から実証的に検討する。
- ・課題2: 同モデルでこれまで欠如していた、こうした制度下に取り込まれる政党の側の論理を明らかにする。

<引用文献>

- 白谷 望、「モロッコにおける権威主義体制持続のための新たな戦略 2011年国民議会選挙と名目的な政権交代」『日本中東学会年報』、30(1)、2014、37-69
- 吉川卓郎、「ヨルダン 紛争の被害者か、受益者か」、青山弘之編『「アラブの心臓」に何か起きているのか 現代中東の実像』、2014、117-145

4. 研究成果

平成28年度に行った研究では、本研究課題の当初の目的であったヨルダンの事例研

究を通じた「与党・野党のローテーション制」モデルの妥当性の検討に関しては、ヨルダンの事例では同モデルの適用が困難であることがわかった。ヨルダンにおいては、1957年から92年まで政党活動がわたって禁止されており、またその後の選挙でも、当選者に占める無所属議員の割合が非常に高く、モロッコと同様の政党活動を確立できなかったためである。具体的には、まずローテーションを可能とする条件の に関して、ヨルダンでは、部族主義が根強く残り、また無所属候補者の議席数が圧倒的に高いため、政党の乱立という状況は観察できなかった。次に2つ目の条件である与野党間の調整役としての王党派政党の存在だが、上記の通り、無所属議員の多さから、ヨルダンには政党間関係のバランスとしての王党派政党は存在しない。他方、条件 の政府への不満・変革の要求の高まりに関しては、先述の通り、モロッコと同様に、ヨルダンでも社会の不満のガス抜きとして首相の「首のすげ替え」が行われている。しかし、その多くは、選挙を通じたものではなく、言い換えれば、「与党・野党のローテーション」のように議会内の動きとは連動していない。

こうしたことから、モロッコの実例を通じて提示した「与党・野党のローテーション制」を可能とする条件は、ヨルダンでは成り立たないことが、平成28年度の研究で明らかになった。

こうした成果を踏まえ、平成29年度には主に、「与党・野党のローテーション制」モデルの修正を目指した。その際、両国の共通点として、双方の議会政治において主要なアクターであるイスラーム主義政党に注目し、それらと体制との関係を、「イスラームの政治的利用をめぐる相克」という視点から分析した。

モロッコとヨルダンにおけるイスラーム主義運動は、体制との様々な衝突を経てではあるものの、これまでに非合法化されたり弾圧されたりすることはなかった。他方、イスラーム主義政党の方も、体制の依拠するイスラーム的正統性を批判することはなく、国家が抱える他の問題の解決を目指し、活動を行っている。両事例にはこうした共通点があるものの、両国のイスラーム主義者の現在の政治的待遇や地位には、大きな差がある。本研究を通じて、その理由には、イスラーム主義者に対するコオプテーションの時期の違いと当時の体制との関係と、政治部門と慈善活動部門との関係があることが明らかとなった。

まず、コオプテーションの時期と当時の体制との関係に関して、モロッコでは、イスラーム主義組織は長い間非合法化されており、1997年に公正開発党が念願の公的政治領域への参入を果たしたが、それは超えてはならないレッドラインが明確に提示された中

での合法化であった。他方のヨルダンでは、国家の脆弱性を背景に、ムスリム同胞団は建国直後から体制の支援勢力として優遇されてきた。慈善活動を展開することは黙認され、同胞団メンバーが閣僚入りしたこともあった。動員力や発言力を拡大させ続けた同胞団は、その後政府と衝突することも増えていったが、彼らが非合法化されるという可能性は低く、比較的自由に自身の主張を展開することが出来ている。

政治部門と慈善活動部門との関係に関しては、レッドラインを超えた場合には再度非合法化されることもありうるモロッコでは、公正開発党は、イスラーム的主張のトーンを抑えて政治活動を行うという立場を選んで政治参加した。その代わり、母体組織は変わらずイスラームの教えに基づいた主張を行い、状況によっては体制を批判するという立場をとることで、公正開発党の宗教的な主張を代弁するという相互補完的な関係を築いている。ヨルダンでは、80年代の政党活動解禁を受け、同胞団の政党部門としてイスラーム行動戦線党が結成されたが、彼らに関しても、同胞団の方針と違わず、当時政府が進めていたイスラエルとの和平に対し、政府の顔色を伺うことなく声をあげた。むしろ、それまで同胞団が慈善活動を通じて築いてきた広大な支持基盤を利用し、積極的に政府批判を行っている。

以上から、モロッコでは体制側の提示した条件を受け入れて公的政治領域に参入するか否かがイスラーム主義運動にとって重要な政治的課題となっている一方で、ヨルダンのイスラーム主義運動にとっては、公的政治領域に参入するか否かは死活的問題とはなっていないことが見て取れる。ヨルダンではむしろ、イスラエルとの和平へと進む体制に対し反対の声をあげるか否かが彼らにとって重要な課題となっている。そして、彼らにとってイスラエルとの和平に関して「声をあげない」という選択肢はありえないものであり、政府がイスラエルとの和平を推進する限り、今後も彼らは政府との対立を辞さないという立場を維持し続けると考えられる。

本研究を通じて、以上のことが明らかとなった反面、平成29年度の目的であった「与党・野党のローテーション制」の代替となるモデルの構築には至らなかった。そのため、今後はイスラーム主義組織に注目した研究から得られた知見を更に深め、両国の安定性を説明する新たなモデルの構築を目指す。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

白谷 望、「体制と癒着するイスラーム主

義運動—モロッコとヨルダンから見るその戦略的・宗教的ジレンマ」、『「アラブの春」以降のイスラーム主義運動』、ミネルヴァ書房、査読無、2018、印刷中

白谷 望、「革命後のチュニジアが見せた2つの顔—民主化とテロリズム」、『「アラブの春」以降のイスラーム主義運動』、ミネルヴァ書房、査読無、2018、印刷中

白谷 望、「モロッコ王制の安定性におけるパイア（忠誠の誓い）儀礼の役割」、『アラブ君主制諸国の存立基盤』、アジア経済研究所研究双書、査読有、2017、109-130
ISBN：978-4-258-04630-0

〔学会発表〕(計 0 件)

〔図書〕(計 1 件)

高岡豊、白谷 望、溝淵 正季（編集）、明石書店、『中東・イスラーム世界の歴史・宗教・政治—多様なアプローチが織りなす地域研究の現在』、2018、240
ISBN：978-4-7503-4631-1

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

白谷 望、「モロッコ イスラミスト政党の再勝利から見る将来」『アジ研ワールド・トレンド』第256号、2017、26-27

白谷 望、「モロッコ」、明石書店、『中東・イスラーム研究概説 政治学・経済学・社会学・地域研究のテーマと理論』、2017、327-332

6. 研究組織

(1)研究代表者

白谷 望 (SHIRATANI, Nozomi)
上智大学・グローバル・スタディーズ研究科・特別研究員
研究者番号：40780119

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：

(4)研究協力者

()